

647

松村操校閱  
西村宇吉編

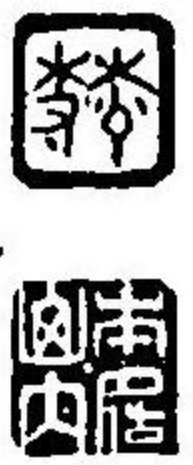
# 新編神史通

東京 耕文社發行

人多不能讀及而無人不能讀  
神史通 官神 官因亦史之支流  
持演釋其詞耳 善古讀神  
官者亦不可 進於讀史故古  
人不廢

癸未七月

春風居士松村操題



同

人多不能讀史而無人不能讀  
 稗官稗官固亦史之支流  
 特慎釋其詞耳善讀稗  
 官者亦可進於讀史故古  
 人不廢

癸未七月

春風居士松村操題





凡例

一世それ書を讀む者の多くその人を知ると慙し殊も  
 近死比の翻刻とらふ事行れそきも己が衣食を謀  
 れどもそれ徒よしと猶著者の氏名をぶに知らざるも  
 あましと聞たり是等の人れざる處にせま得しうく此書  
 の編出しうあまし  
 一言一行をも編者自恣せせ必出所ありた々煩死  
 を憚りて書名ををまざるさき又諸家を叙するも敢學徳  
 比高下年代の前後に拘らず筆れまよく是を録しゆ  
 一傳毎賞賛の詞多しその人々れ名譽を傳へんとの意  
 ゃく美事のみりき職たきばさくの賞美れ語多死と知  
 るべし

新編神史通

春風居士閱

西村宇吉撰

○十返舎一九

氏を重田、名を貞一、通稱を與七といふ駿河の人あり居を江戸橋町と占先  
 又深川佐賀町に移り終つて通油町に定む

一九幼時市丸とよぶ故に市を一と作り雅号と弱冠の比江戸に來り一侯に仕  
 へそのうち大坂に往き彼地に住み旁香道を嗜て譽あり十返舎の号は黃熟香の  
 十返をととりてまひ呼といへ其比の事にや並木千柳と俱は木下蔭狭間合戦の練  
 戯曲を作りたるよし後故郷りて香道に遊ぶを禁せ寛政六年ふさくび江戸に來りて  
 戯きに神史兩三部を著とみれその著作の始なりといふ  
 一九の著しゆる書彼世に聞え高死膝栗毛を始として文政の比に至りて既に二百  
 餘部及ぶ就中滑稽の作は長し看者も亦願を解き愛笑ひくやまき吾邦の才子書

とと實に此人の著編などをやみふべうらむ

一九性洒落おして俗務に汲々々々故よ米錢饒ありとて喜べる色なく乏しけれど  
又更にあれを憂へせあるほどの錢み酒にうへておのれも食ひ人にも飲せあよき  
き娛樂とと有る調度亦ども多く人に取らせて家のうち最あむれりけきバ壁を白  
き紙にくとりて簞笥床の間違棚花活懸物の類み寄寄がきて又傍に土庫の入口を  
どうきたり遠くより望み見るとさき富める人の家け細くに近くよりて見れば皆  
畫がさたるものあきバ人々その奇趣に驚き感せざるをさし七月の此あどの中元の  
環棚かざらんにも物おけれをこれをも繪にかきて壁にはり朝の素麵供へんとて畫  
がきてとり暮よの餅さうげんとて亦りきてはる年の暮あければ大なる臺に三尺  
餘の饒餅載るる圖をかきて壁にくとりしとぞ  
わる年の除夜に一九俗事の煩きを避け黄昏よりそよよと遊びありさけるが  
柳原の邊に日ごる睦み語らふ友のありければそあに行しに此友も家に在りて酒を

飲てをり一九嬉しく思ひて俱に酒飲てさわざしが果の立て舞踏とて一九もとより  
身材高ければ偶傍の棚は頭いさく打つけつ此棚の清らある板もてあきのかたに向  
ひ筋違ひに吊りたる年徳神の棚なりければ一九とりあへせ狂歌一首をよみて

正月とはや神田までさうりけん

筋違につると一徳のな

と口号む主いと面白しとて近隣にいもきて物語りけれを此隣の酒店の主聞てさら  
ば先生を招きまはれといふ一九何にかあらんとて往けるに酒店の主床の袋戸  
又指さして曰この戸の櫓つ比名ある書師に乞てもせしに月に杜鵬をかゝれたり  
此鳥の蜀魂死出の田長冥途の鳥又血を吐く鳥ぞといひて最思しき鳥之加旃  
月の陰のものよて常に心にかゝりぬ願く先生これによろしく歌よみて賜べとい  
ふにぞ一九易き事ととくやがて筆執て

月と笠鳥のうらちと雲に似てあれや寶の山はととさぞ

とかきけり主大よ喜びて此禮に何をり進らせんといふ又一九聞てさ酒を賜  
 されといふさつに進らそべしとて酒肴所狭さまで取出してさまくと饗應ければ  
 一九此夜のこゝにて酒を飲み太く酔ていざ還らんとて暇を告て立出しが傍の土庫  
 の前に居風呂の桶ありけるを見て此桶貸しつまへといひければ主答へて最易き事  
 といふ一九直に持出さんとするを主おし止めてその餘りに不禮なり明日小衛に  
 擔せて進らそべしといふを一九頭をうち掉て否々かたのりの物持行んにいのでく  
 るしかるべきとて彼桶倒にしてうち冠りて出行けるにとや天明に近かりけれど  
 除夜のとなれば往來の人も絶えざ一九を見く異むりもわり臆病の人の桶の怪物あ  
 らんとて逃んどそるも多うり或人おれに衝中りて此白物おどて吾に中りしぞと怒  
 りければ一九桶の中より罪の汝にあり吾の桶冠りてもの見えきと吐けばその人も  
 うち笑ひて行過ぎぬ一九太く酔つるうへに桶うち冠りければ足ひひこぞらよるめ  
 さつと辛して家は還りけるに既にして夜の明たり元日の朝風いと寒くて耐凌ぐべ

からせ一九彼桶に若水汲いれてみづうら火を燒き湯を沸してこれに浴して身を温  
 め最心地よしとて喜ぶと限さしかる處に日比睦しく交らふ近江屋といふ商家  
 の主上下衣服おどさらしく打拵て初春の祝賀述んどて入來ぬ一九大に喜び先  
 酒を出してこきに飲せ吾も盃を傾てさていとく今日風いと寒し浴してゆき  
 たまへといふ質屋の主の辱しとて頓て上下衣服おどそこに脱ぎおきて裸体に  
 なりて居風居に入りけり一九の小屏風持來て風呂の周囲を掩ひて外を見せきその  
 人の脱ぎ置つる上下衣服手早くうち着て扇脇差まで腰挿しそと脱け出て近邊の  
 友人れうを年始の禮ありとてありたたる彼人の浴し訖りて見れを己の衣服上下  
 俱おなし一九も居ざりけき大に驚き一九が脱置つる衣服を着て外に出て此處彼  
 處と尋ねれば先生と稱ふ年禮よ來られしといふ家あり此人の素より一九と心限あ  
 く親み交るものおをそれ雅趣と感て手を拍て笑ふばかりあり一九の心の限り年  
 始の禮述べぐりて黄昏比かの近江屋に至りて年頭の禮おればとて奥に入りぬ主一

九を見てませくうち笑て己ませ一九のやがて衣服うち脱てかへに置き今日と  
君の御恵によりて年禮をもつとめたり猶此上の恵よと酒を賜とりなんといふ主い  
よく面白しとて頼て酒とり出して飲せければ太く酔てその夜子の刻をかりに還  
りしといふ

一九常は遊郭に入り遊むざる樓も亦く面識あらざる妓も亦しかる高名の人に親  
先バおのづうら他の客人を招く障得となるものなればとて娼家等相議して大門よ  
入るとを拒みしうば其比名の聞えざる爲の唐丸といふ人加判して一九ふたふび大  
門より内に入らざるといふ証文のさて遣しけり斯て三年ばかり歴て彼証文の取返  
したり然るに此証文世は珍しきもけなきをとく一貴紳志きり乞ふまひて表装  
して床に懸々賓客の移るをりと此物語してその奇物を獲たるを誇られけるとぞ  
一九夏の始日比親しき質屋に至りて今要用の事あるを錢貸したまへ替とせべき物  
時移さき持來べしといふにぞさらばとていこるる隨に貸與へぬ一九受取て還りし

が頼て又入來て伏紗に包る物取出ておれと二十兩の金も猶餘るべしおれなれ  
どおれを預け進らざるありといふ何やらんと聞き見れを酒屋薪屋あどに物買たるを  
促さるる書出といへるもの最夥さを掻聚れて持來つるあり主驚かしてまひ三  
十兩にも猶餘るべきものおれと貸するにあらせ借たるにて何よかあふん貸進らせ  
づる錢とく返したまへといへば一九頭を撫て其錢と松魚と酒とにありて今と残り  
なしといふ主いよ驚かしてまばし物いとぞれ一九も詞なくてほりし頼て家  
に還りて松魚をとらう出て酒うち飲てゐける活處に質屋の主入來てさくも御身が  
行實よおもしろし書を読み書を著し酒を嗜みて世事を愛するの能他人のあし得  
がたき所爲にかし漢土の阮籍阮咸劉伯倫杯の類にや最羨むべき事とて切に賞て  
俱酒飲て借腰ある扇取出て是に歌書て賜とるべしといふにぞ一九うち笑ひゆ  
借金を質よおいても初松魚

もと先くくとん利もくとくへ

とまた、めければ此人大に感じ且即妙なるを嘆賞してを還りけるそれ脱落率かくの如し

一九少時の富める人ありしうと中比の初の如くならせ晩年に子許多設けて酒さ  
せも多くの飲せおれによりて家もまた富饒ありしといふ

一九戲編に長たるのみあらせ手蹟も最妙にして書をも能せり膝栗毛などの自書と  
見ても知るべし

天保二年八月七日病に罹りて死す墓の淺草 佃俗土 善龍寺地中東陽院に在り佛号を  
心月院一九日光信士といふ辭世れ句に曰

此世をばとまやあいとまにせん香と  
ともよつひにの灰さやうあや

○山東京傳

名之醒○字の酉星○醒々齋と号と又山東庵菊花亭等の号あり通稱を京屋傳藏と  
いふ磐瀬氏あり

京傳と江戸京橋銀座二丁目に住して烟管烟包並に家製の讀書丸其餘製藥を習て  
生業とと初め北尾政美の書を學びて書名を津齋政演とよび又狂歌をよみて身輕折  
助と名れる後著作を専とせり吾邦小説の中興者あり

京傳の著せる稗史と文体一家をきしむらくとして婦幼にも讀易く尋常よく聞  
熟れざる奇語見あらざる僻字等と決して用ひず趣向新奇を主とし用意も亦深け  
れば其書の行とるゝと古今其比るかりしといふ

行狀の大要はその弟百樹号を京山が撰べる墓誌に見えられ左に錄と 墓之本所回  
向院は移り  
亡兄諱醒○字酉星○一字京傳○号醒齋○号山東庵○磐瀬氏○其先  
出、自磐瀬朝臣人上○近世資詮者○仕太田道灌○爲謀臣○道灌



亡。世隱<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>勢州一志。祖父信篤。父信明。仕<sup>ニ</sup>某侯。多病辭<sup>レ</sup>仕。隱<sup>ニ</sup>東都市。娶<sup>ニ</sup>大森氏。生<sup>ニ</sup>二男。二男亡。兄爲<sup>ニ</sup>其長。自<sup>レ</sup>幼好<sup>レ</sup>文。十歲寫<sup>ニ</sup>孟子。今尙存<sup>レ</sup>家。自<sup>ニ</sup>十九始有<sup>ニ</sup>稗史之作。上<sup>レ</sup>梓者五十餘編。因<sup>レ</sup>茲其名聞<sup>ニ</sup>海內。王公妾婦。牛童馬走。無<sup>レ</sup>不知<sup>レ</sup>矣。今茲文化十三年丙子九月七日病沒。歲五十六矣。予弱冠出仕<sup>ニ</sup>篠山藩。病辭<sup>ニ</sup>仕。與<sup>ニ</sup>亡兄同<sup>ニ</sup>塚。視<sup>ニ</sup>有<sup>レ</sup>年。無<sup>レ</sup>常風來玉樹碎。痴心月照蕪菰堂。嗚呼悲哉。

愚弟 京山磐瀬百樹謹撰並書

但右に<sup>ニ</sup>生歳とあるを<sup>ニ</sup>没年と享齡をもて數るに<sup>ニ</sup>寶曆十一年の生産なり<sup>ニ</sup>深川木場にて出生すと或人いへり

著作家常に稿本を草する時ハ物騒しきハ更之寒暑を惡み來客の長坐を厭ふ事之皆然ありといへども京傳ハ殊にまれを嫌ひ平常草稿を綴るをりの食器を傍近く整と

せ置て時を定めを欲しと思へるとさハ食し又溺器をもその一室に備置て用をたしぬと聞けりその勉強實に想ふべし

舖上にて自書贊の扇短冊なども贈さぬれば自詠の狂歌俳諧は發句の類多く世に傳りて今も人の誦する所なりといへどもわさて妙ありと覺ゆる一二を擧れば梵鐘を書きて

家業夢中 始終滅亡 正直律義 格別氣樂

拂子如意を畫死する贊

如何是通子再來也意夜前のうしともち猪牙舟又糸むる

山々れ一度に笑ふ雪解ふ (以下失題)

狂言の秋れ半でムリ升 そまを沓々あゝり下駄々々

柴のトがたふ月の○

仲秋は月に先でくと今川が

としへもどく酒宴遊興

京傳の著作書よく海内に行たるをもて其風を慕ひ業を學心んとて門人たらんと  
 を乞ふ者多しといへども絶てまれを許諾するとかし故に自著の小冊絞染五郎剛勢  
 談の万福長 著榮華譚 ふ斯の如くあり。あまとうをまがましくいへども京傳かた  
 へ戯作の弟子入りさく断断や上いと見えたりさきども猶其門に遊べる者關亭傳  
 笑とせじめとして京傳門人龜毛と物お見え又門人拜田泥牛といふ名も見え山東唐  
 洲といへるも門人あり是等の已むを得せしと允せしやあらん  
 世俗己をよしと自負する者をさして自惚といひ自惚を又艶次郎といふ此艶次郎と  
 いふ詞の京傳の著書より起れるありその書藏れにもせざる江戸生空氣蒲焼とい  
 ふ冊子も自惚ある若者の名を艶次郎と号たり然るも此冊子大に行れ遊郭などに  
 て自惚の客人をよきと擬へその異名と艶次郎と呼び習としより竟る江湖の流行

詞とありて今も猶人口お遺るといありぬ今嫉妬を甚助といふも此類之

右の冊子の寛政九年の刊行ありその翌年又三和の著しる冊子又繰返艶物語  
 といふを京傳書名は是前年に空氣蒲焼大又行をしによりての作意にて題  
 号にもかく艶次郎の名を寓して命しものあるべし接は艶次郎の艶治郎といふ漢  
 語の治を次お換しもの歟

或説に舊氏の拜田といふよしをいへり又舊号を寶山と云るよしをいへり寶山の  
 号と古き冊子の印章に寶山の兩字を用いたるわり又浮世繪師考といふ字本を聞そ  
 るよ是にも寶山と号せとあり

文化十四年二月弟京山京傳の死 京傳が年來用ひられたる文机を淺草寺の境内赤  
 る人丸祠の傍に瘞て碑を建つ 碑の表面に京傳がう糸く作り置たる文机の  
 記を勒し背面に太田南畝人の撰文を彫たり今全文を左に擧ぐ  
 表面

明和六年といふとしの二月をうり齡九歳といふに師のかどよいりたちてゐるは  
もじ習ひそめしとり親のたまよりしふづくゑあむ此つくゑにのわりけるされば  
つくりなまもゑろそかにてみやびたるかたの露あけれどとぶらし捨せとし頃た  
のもしくてかたをさらせひとり愛つゝありしとしの五十にちかく何くれ  
とつくくる冊子の百部とよえたり今のおのがあゝるたましひもはれしうま  
きこもかすみゆくといつしうまれもたじろさからにゆびみなどしてもろかに  
老しらへるさああるのわされいかいせい

耳もそあね腰もくじけて諸どもに

よにふる机あれもかいたま

山東庵京傳

背面

翁諱醒。字酉星。号醒齋。又号山東庵。稱傳藏。以其所居近京

橋。一字京傳。故其爲京傳最著。磐瀬氏。其先出自磐瀬朝臣  
人上。近世資詮者。仕太田道灌。爲謀臣。道灌亡。世隱於勢州  
一志。祖信篤。考信明。仕某侯。多病辭仕。隱於東都市。娶大森  
氏。生翁。及百樹。翁少好稗史小說。數百著作。富。戲文幻說。  
繆悠無根。能使人悲。能令人喜。坊間書買進於割剗者。利市  
三倍。於是兒童走卒。莫不知京傳者。晚悔少作無益於世。改  
勵刻苦。搜索奇秘。著近世奇跡考。及骨董集。二百年來奇跡  
逸事。考據精確。可以補小史矣。文化十三年丙子九月七日  
沒。歲五十六。葬國豐山回向院。弟百樹埋翁幼時寫字案於  
淺草寺中梯本祠側。以遺財建碑。刻翁國字記言。以告後之  
讀其書。而不知其人者。爾。

文化十四丁丑春二月

江戸南畝草撰

文化五年著作の小冊に辻君所謂夜寝をおほく齎さたる繪様有りて或の偏盲鼻缺また鼻より頬へかけて膏藥をひたどうちたる光景を悉く見苦しき姿に畫きあししを實の辻君まねを見ていかに吾等なればとて斯まで醜き形狀にていあらぬを畫きひひめたるは是みる作者の所爲之京傳をもし途中にて見るとあらば捉へて此よしを怨んものをと據て相譚あせて置つるが一日黄昏にうち連て其場所へ往んとする折しも偶京傳に出逢ひたりその中に京傳を見識れる者ありて彼をその京傳あれ日比の怨と述よりいとん程こそわれ伴ひつれたる辻君等むらくと走寄り京傳を真中より取囲み口々にたけり罵る京傳の思ひ設ぬ事なきを驚くと大かたあきせそのうへ臭く穢しきと限りなければ術よく勤解れども彼等の猶總ず汚さを厭ふと見て故より取つさ絶るもありてはとく迷惑に及びしを京傳とてにのくにいひあしらへて吾後日に此言のさるしを見せん今の放ち返せよと只頼諭してやうやくにて其場を推避て還り後に以して彼徒に前日の謝物として金を贈りしうは辻君等も大

にその誠心に差てその後の怨を含ざるのとなりき深くもその徳に感服せしとぞ是より京傳の名彌増に高く彼書の行とるゝとも亦隨て三倍せりといふ京傳十八歳にて始めて書を著しよとて文化元年刊行の自作の小冊作者胎内十月圖にその年にて二十七年戲作あよしいへき安永七戌戌年にあたり此時十八歳あり然るお前に擧たる京山の撰文の墓誌に十九より始て稗史の作ありといへるの安永八年刻成て發行に及べる時の事をいふにて胎内十月圖にみづから書けるの稿本の成りし時をいへるなり

文化十三年九月七日病むと數日にして死と享年五十六兩國回向院に葬り佛号と辨譽智海京傳といふ遺蹟の弟京山の繼ぬ因よ云京山の名を百樹字を鉄梅といふ幼より文武を嗜み弱冠にして出て笹山侯よ仕へ後多病よよりて仕を辭し鉄筆の技をもて業とし又好て稗史を著し兄と俱よ名あり文政五年よ建なる壽藏の日記にその年五十三歳あるよしをいへり然れ

明和七年の出生にて京傳より九歳おとれるあるべし

○式亭三馬

氏を菊地○名と久徳○字を太輔○通稱を西宮太助といひ式亭三馬と号と本町庵○  
四季亭○酒落齋○哆囉哩樓○遊戯堂等みなその別号なり

父を菊地茂兵衛といふ八丈島為朝神社の祠官菊地某の子之茂兵衛故ありて江戸  
に移住し三馬を淺草田原町に生めり

三馬幼にして奇才あり十八歳の時既に書を著し其名早く都下聞ゆ後某家の婿と  
あり配偶の女病て死し、う彼家を去りて四日市に居し其比より専戯作を  
し後石町新道に移り遂に本町二丁目居を定めて藥を鬻ぐをもて業とし巧に一  
世を紙筆に間と玩び兒童走卒もおれを知らざるものなさに至きり

三馬嘗人に語りて曰らく吾伯母と太守公の奥殿に仕へまるくせけれバ予幼き比伯  
母へ對面のため奥殿へ至る毎に好む所の道あれバ傍にありあふ冊子をとりて讀む  
をその席に來合と仕女たち此童戯にも似氣なく書を讀むとの拙からせ今の程より

斯文才のきつ後にいりあるものなりあらんぞらんぞいとれしが十三四歳の比  
よの所有戯曲本をも讀盡し十六七歳の時戯作の志あり十八歳にして始めて天道浮  
世之出星練といふ小冊を著し上梓しぬ是の寛政六年の春之此冊子を作るのとき  
夜寐るにも衾の袖より手を出して稿をあしたり斯てその成れる後みづから雅号を  
命んとて然るべきと思へる号三四を小紙よりきつ其紙と小くおし捻て手づか  
ら傍に投てそれを又拾ひとり得たる所の捻紙を開くに書つけありし雅号と即式  
亭三馬にてありしうは是にて心を決し遂に此号を用ひたりと語れるよし某書に記  
せり

寛政十一年侯太平記向録巻といふ書を著しくに人これを怒れる者ありて官府に訴  
へ三馬おれによりて罪を獲たりしのを幾程もさく釋されけり其後親族朋友あど屢  
著作の業を廢せよと諫れども三馬一跌をもて敢其初志を變せよ翌年又一書を著し  
ぬるに前年は事よりして其名まそく高く竟に一家を成とに至れりとぞ

三馬に二代目芝全交になるべしと懲悪る人ありけれども三馬答て業は拙くて徒  
に古人の名を汚さんと本意にむらまて辭みけるよしなり然れば自著は樂屋通及  
馬笑が作廓節要にも式亭三馬儀古人芝全交の遺言は付此度より二代目の全交と可  
相成善よし得共いやしと妄作を以て古人の高名をけがると恐れ有と存じいまご改  
名の不仕差ひのへ罷在し猶不相替全交館と被思召御一笑奉希いどあるせ  
り亦卓見といふべし

三馬著作に敏捷にして稿を草とる時三日三夜にして凡六七巻或は八九巻の書  
を脱成とると屢次あり故に巻尾に三日三夜急案とことわりたる冊子も多くなり文  
化ればはれと書肆の三馬は稿本を乞ふ者特多しその約束の期は後れ債らるゝ  
に苦みて五日或は七日程づゝその書肆の辭にいたり一室を借て草稿を起しとあ  
り例へば今日まで某甲が樓に在れば翌日の某乙が離亭にゆた此處彼處めぐり  
くく尙それにても手の届で約束に後れたる書肆に責らるゝと苦みてその行方

を知らせ後よりやうやくよてそまが方へ廻りゆくほどありしといへり

三馬旁狂歌を能し撰集の狂歌鴈ありてその道の人に敬仰せらるる當時世俗の流行詞にいつもお若いねといふ語と專いひとやしゝりバ或人彼流行詞をとりて「と

やり詞ちらへて達磨さんいつもおあかいめしめをのり 此歌原書に誤脱字と詠て見せしに三馬曰此歌の書畫會の席上おまにて物に賛乞きて即興にぞるよりよしと

いへども近休は狂歌ふの得さるる吾あふは如此こそ詠むべけれとて「とど堤老木

もとさにおくれきていつもお若い花のかはせせ口を衝て朗吟せしうバその人即

詠み敏捷あるを感じて已せ凡書畫の會筵に於て書のかたに應じそのしに取あへ

す賛の狂歌を詠出て書て人よ興るの三馬よ双ふ者あのみしとぞ

三馬狂歌の秀逸もとより多しといへども殊も面白しとおもふを左に録せ

達磨の賛  
如何祖師西來意九年面壁のなんざんと苦界十年お客と壁とよらみ破る身の蘆の

葉のそれすらぬらふふしまげき川竹の流に立る眞實の色客へは操よして不立  
文字のまことぶとわれバ直指人心のめびさりあを以心傳心の格子頭見性成佛の  
床の内とまるの本来無分別されるの心外無別法迷へを通も不通とあり悟れば不  
啼も啼とある柳巷花街翠帳紅閨柳の緑花のくれさるの禪味にかよひくるわの  
ならひ禿のみどりとよぶとも花もくれあいの客の心のいろくの吁駒下駄の呵  
囉々々喝

達磨さん腰から下の怎麼生  
女をたらそ一物もあるし

ひとつ家のいよし五町まらの今と思へば  
日にくれて野よのいとらとで宿から

浅草寺のうしろなりけり

或人三馬は語りて日頃日吾友某といふが講義にて源氏物語末摘花の巻と聴つる

が是のいざの戯作の補助ももろりさんやと問ひければ三馬答て彼物語の諸物語中の翹楚されば人々多く和文辭を綴るお補助とせざるものさしといへども戯作者の素意のなるむつかしきものよわき和殿今より戯作を志して心を慰めんどの思あらば源語一部の講釋を漏さず聴くにも及ばず源語の事も水滸傳の事も少許づゝ聞はつりし事あらば似つこらしき事ととりあして巧に書んこそ戯作者の働さとする所され餘りに源語よこりどぎてかやくと笑ひさやくとどりひしぎなどの類さすごさしの源氏風の聞もうるさしとて手を拍て笑ひたりと某書お見ゆ

文政五年閏正月六日病て死と享年四十八深川雲光院に葬る佛号を歡譽喜樂奏天信士といふ辭世の句に曰

善もせせ悪もつくらす死る身の  
地蔵も譽せ閻魔まのらさ

○曲亭馬琴

氏ハ瀧澤名と解字ハ瑣吉通稱ハ清右衛門後童民と改む馬琴ハそれ号あり篋笠○支同○開齋○顯齋○信天翁○狂齋○愚山人等ハ別号あり

初飯田町中坂下に住し著書の序文おとよの後家を婿に譲りその身の男宗伯と同居そ宗伯名の興嗣琴嶺と号す松前侯の侍醫とあり神田神社の側同朋町に住む文政年中馬琴剃髮して通稱を童民と改後又四谷信濃坂上へ移る

其先の三河に出づ會祖興也にいたり武藏國埼玉ハ人真中全直の次子興吉を養て嗣とちと真中の源頼政の郎黨猪俣太守資の裔あり興吉の子興義兵法お通じ擊劔射騎をよくも馬琴ハその季子と

馬琴少ふして書を讀み長ぶるに及びて才高く殊も著作を好む寛政二年の冬釋史二卷を編て翌年刊行と是書を著との始にて時に二十四歳あり即題号ハ廿日餘つた用而二部狂言とあり芝神明前和泉屋次て同五年發刊しと街道御茶漬十二因縁



三冊と荒山水天狗鼻祖三冊と花園子食家物語あり是より年々數板に及べり

馬琴の生歳の没年嘉永元年より逆算をきば明和四年丁亥なり又剃髮の年の傾城水

澁傳卷の八花からの阿達が出家の條に書入して異竹の世をまつるに之をわらねども

云々とあるし剃髮の歌を添たり文政七年にこの稿本をあしつるにて其年剃髮の証

とせし且文政七年八島定岡が著せる狂歌現在奇人譚後編も馬琴の事を載て今

茲五十八髮剃をろしてみづうら笠翁と号くとあるせり

馬琴疑を幕府の儒官柴野栗山に質し經籍史傳窺ざるものなく學力の長ずると他

の著作者流の及ぶ所よわらざ故に小説の外に著書亦多く簞笠雨談の燕石雜誌○烹雜

の記○玄同放言○獨考論○羈旅漫錄○吾佛の卷○俳諧歲時記等の殊よ人の愛讀する所

なり

馬琴寛政の初より五十餘年一日も筆をなくとありて著す所れ書三百部に及ぶ

其書悉く善と勸を惡を懲とにあらざるものあし就中讀本にて世に聞えたるの椿

説弓張月○朝夷巡島記○俠客傳○南總里見八犬傳の類あり又合卷よて傾城水澁傳○

新編金瓶梅等大よ世に行はる殊に八犬傳の行とるごと我邦古今の小説こそよ比ぶ

べたものあしといふ

馬琴稿を草とする時俗は所謂ぶつとけ書にして綴りもくに文章水の流るゝが如く少

も淀びとなく立地に一番をあると文体よく一家を成し後生これを學ぶもの多し

緒餘また狂歌をよくと其即詠に速ある人の感ざる所之嘗人あり短冊一枚を持

來りて馬琴が豫て詠みたる歌の乾綱も屠蘇は袋のなまよ似と祝ふ銚子に濱の初

春といふ歌を書て給とれといふ馬琴承諾てよく墨磨り筆執りて彼短冊取揚て上に

海邊初春と題して初よはを綱と書へるを偶思違て屠蘇と書ぬこり誤てりどて雲

時隣踏へを其人曰然や他の歌にても苦からせといひけるよど馬琴其筆を引ずして

屠蘇くまぬ浦の苦屋も春くれバ

香よ酔ふ門の梅は花貝

十六

新編科史通

新編科史通

新編科史通

新編科史通

新編科史通

新編科史通

新編科史通

新編科史通

とかりて與へければその人と大に感賞し數回禮を述て還りける是の其席に居合ま  
し人の筆記に見ゆ

或人初て著述せし冊子の事を問ふ馬琴答て曰寛政二年深川よて何やふん開帳  
の有りける時京の壬生狂言來りて大に行れしのは其事より想起しての用尽而  
二部狂言の二冊物を編み盡の豊國のものしたり始りかふる事より案を起しこと  
語りたるごと

天保七年齡古稀及び諸人勸て賀筵を開くべしといふ馬琴初の允さりりし  
うと勸て己ざるにぞ秋にいさりて終よこきに任せて八月十四日柳橋ある万八樓  
又文人墨士を會合する此日盛會あり馬琴自祝の歌をまゝとて扇紙紗など  
を人々與ふ歌曰

尽せじあよとひのさゝいさし龜の  
よろづよもぎる嶋をおふまで

名にしおとり出よ千歳の友にせん

うくきみの龜のくれ笠松

南總里見八犬傳と朝夷巡鳴記とを評して大夷評判記と名づけ文政元年六月刊行と  
黒き表紙をりけ横本三冊とあし批評の三枝園主人答述の馬琴考訂の襟草琴魚あり  
自笑が役者評判記の体になし 是にても二書の大に行れしを知るよ足るべし

馬琴その友を擇て濫に俗人と交通せ常々帷を垂れて引籠り訪ふ人あるも生面  
の容より病を假托て敢面するとなし其簞笠と号すると即隱逸の義にして衣笠内  
大臣の歌に身のうささとのかくれにせんと詠きし心操に同く簞笠の二字と其身  
け大關目あるべしといへり然れをよやそれ自詠の歌にも「世よびく身の隠れ簞  
うくれ笠」ある名れと打出の権などあり

八犬傳初輯の稿を起し文化十一年よして 此時馬琴全編脱成せし天保十二年  
八月十五歳なれば其間星霜二十八年を歴り晩年に病眼大に衰て代寫させ

て全局を結びしもの斯き詠ある

ゆとまとい見る人おもへ八重とぞれ

かふるやみ目にあまことと書

又八犬傳の巻尾に題まし歌り

浮萍れうたしそさびもいまし然れ

筆をよるべの根あし言の葉

馬琴務めて和漢必用の書籍を購求ると五十餘年既にして所藏の書五六千卷

十餘櫃及べり毎に衣食を省き節儉を旨として書籍を購ひけるよしのみづからも

動に載せたり然れば引証該博あるも亦宜ありといふべし

東岡舎羅文の馬琴の兄之名の興旨臺右衛門といふ性俳句を好み詠する所多し寛政

十年八月十二日死と享年四十源光寺に葬る墳墓の臺石は病中の吟を馬琴が書くる

を勒付より馬琴の著書の像賛を羅文の詠を引さるもの多ければまことに記しつ

馬琴京へ遊べる時伊勢國を過り津宿りて浴せんとして女に案内させけるにま

なりとをしふ見れば戸棚といへるものゝ如きものあり傍に大なる桶ありければ

湯のまれきりと心得てさく衣服うち脱てかの戸棚に納んとするを女驚き止めて

その衣服納る處にあふぞ即浴しなまふ處ありといふにぞ。さていとて衣服の側

に置てかの戸棚の内に入て見れば湯の一尺にも盈す側にありし桶の水桶なりしう

ば馬琴をかしたの隨に

もれと名もとあろによまそゝるこ

江戸の戸棚の伊勢れそゝる

とよまけるとぞ最おもしろし

馬琴その名都鄙を動とといへども人の師とあることを好す故に戯墨の門人といふ者

あし著作の冊子に魁蕃子又傀儡子又作るあまいふ名も見えたれども未生の人にして實に

其人あるにあらざ然れども猶その門人ならんと欲して紹介を求めて切に乞ふ者多

けきば只其人の心得の爲に身を修め家を齊べき事を説示し又暇ある時の老子莊子などを講するまでにて戯墨の事の固く辭みしとぞ玄かるる其の中に志の深き者の入門を辭るゝの力及ぶをいひて琴の字を戲号に許したまへといふ馬琴答て琴の字をもて名号とちと者吾のみならせ古今の儒士に其例多しその心のまよくなるべしといひければ皆喜びて琴雅或は琴梧琴川琴魚など名する者ありその中に襟亭琴魚の殊に文才高く青砥石文の窓燈餘譚等の著あり

馬琴の勉業の亦常人の及ぶ所にあらせ毎日夙に起出て机にひりひ其夜人定まで稿本を綴りて疲勞を厭とせ亥の刻過ては睡氣の催とまで書を讀てみづらの樂とそもし佳境に入るときは天明を知らせ曉鴉も驚されて頓て起出て机よひのふ日も亦多し斯の如きと數年及びければ逆上口痛の患起り年五十に至ては齒のみな脱落く一枚もあらず夜枕も就くとさ仰臥せは瞑時堪へせ横臥せは綴り此愛きし因て醫師の詞に従ひ是より後の夜學せせ書著も亦年毎に二板と定めて其餘の

需に應るとさく夜も早く枕も就しは身もやうやく健全に復せしとぞ

或人馬琴を訪ふ馬琴語りて曰是れまで自著の冊子一部も漏さ所藏せしが一年の夏二階の物乾て晒書れを風にあてたる時外へ吹飛さきて文化三年出版せる武者修行木齋傳一部を何處へ失ひつ其後骨董舖なんどにて彼書あらば買取らんと思へども近來の老脚自在を得糸竹杖を門外へ曳き遺憾の此事のみ語りければ其人答て曰吾公務の暇ある日の市中を徘徊故にもし彼書を見らば必購取て進らせんと約しく常ふその事を心に占め間斷なく捜せども見當らば初約まし時より五年目に料らせも手あ入れたれば取あへ馬琴の許を訪く懐く懐くも優くいと有がたし侈心の切あるより全御手入たるものあらん長く秘藏し侍る之是よく拙著悉く関を藏するを得たりとく欣喜色も顯れしとぞ事載く某人の筆記に在り俱其志の厚きと今人より亦頼く望みガし

晩年老眼大に病衰しく明ならず然れども猶著作を輟す婦をしく筆を執らしめ己口授しく草稿を代寫せしむ其事のみづうら八犬傳第九輯五十三の下巻回外刺筆に記したり其條に曰九年以前癸巳今云癸巳の秋八九月は時候より或るありしに天保四年之あるありしに有一朝不圖起出けるに右の一眼見るとを得せうち驚き且訝りて故兒に示るとに瞳子上の方流たり療治さるべしといひけり其後親族朋友書買等まで治療を薦る者多うりしりと吾敢從ひせ且おもへらく吾の幼稚より眼の患あく流行目ごも病まるとわらず然るを今一朝に右明を失ひして年來讀書筆研の疲勞あるべく且冬春毎に高き火桶を坐右に置れて机邊の寒氣を防ぐ事既に久しくありしを其火氣何時となく右明入りて乾りささるるにどほらむせらん譬ば老樹の片枝立枯たるに異あら非如醫療は術を盡せとも草根木皮のよく及ぶべにあらせと尋思えて一日も筆研を排斥せせ初ハ硯心見難く毫を染るに不便ありしにそれも熟て不便にも思はせ其後故兒の憂より丁りし年も世渡りあきば忌も闕てハ又筆を把らざることを

得せ其次の年四谷へ移徙きても左明の異なることもあければ著編と尙年々に綴りぬる程又戊戌の春は時候より何となく左明も亦弱むやうありしに夏に至りてハよく其異なるを覺しうども尙悟らざる眼鏡の曇りたる故あらせと認思ひて俗に本玉と歎いふ水晶製の眼鏡の價貴を厭いで此彼と多く購求めて掛替々々凌ぐもればかゝ己亥の春に至りてといよくのぞみて病眼あるを知らながら本傳いまだ大團圓に至らぬ心書肆の需を推辭も得せで猶辛じて綴る物志の外おもあまなり恁而去歳庚子の春までの本傳の稿本も故の如く十一行の細字にものせしりども夏に至りてハ只臆々臆々として細字を寫と得ならぬ其稿本を五行の大字にしつ其も手撈りよて去歳の秋九月本傳第九輯四十五の巻までつゞり果して刊行の書肆文溪堂の責を塞ぎにのりてハ明年四十六の巻以下を綴り果さんと心許あし先や尙のくつてハ程に今一卷ありども綴らむやと思心を勵して第九輯百七十七回一願の智王途に一騎の驕將を懲るといふ一段を五行或ハ四行の大字にもの

之ぬるよ字行も鈴灯兵兵にて且墨の續りぬ處ありて讀がしといへば开を宅眷に  
 補せなど之ぬる程は十一月に至りて宛雲霧の中は在如く又臘月夜に立に似  
 て一字も寫と得あらざりぬ只筆研不自由なるのさから書畫を見ても楚と見え  
 せ僅は晝夜を辨じ東西を知るのさといふともせん術なきをば書案を退け筆を投捨  
 て獨歎息はほまりに

かのふふるかひろあななきを見えざる一書卷川に猶習る世とうち詠じて爐  
 又寄てのと居程に文深堂及賃本屋あといふ者さへ聞知りて皆慨しく思ひぬとさく  
 爲に代寫すべき人を索るに意に稱ふ然る者のあるべくもあらざ吾も亦失明ての生  
 甲斐もあらざれを這年の秋九月より次の年まで人の薦る醫師を三名まで轉藥之ぬを  
 ともいさゞ毫も效驗あらざ然を今茲辛丑の春に至りて吾又おもふに八大傳の今昔有  
 がらる大部の物の本なるに始ありて終なくの只看官の飽を思ふのさなら文溪  
 堂が爲にの後々までも利を全くまごたくて遺憾こそあらんをらめ人の爲に讀り

て忠ならずぬの吾も亦恥る所之然バとして吾孫與邦の倘乳臭ある机必うせせ且武藝  
 を好める本性されバ恠る補助にあるべくもあらざ他が母と人並にふざり書もそれ  
 ば教て代寫させむやとやうやくに思ひりへしつ第百七十七回の中音音が大茂林演  
 にて再生の段より代筆させて一字毎に字を教一句毎に假名使を誨るに婦人の普  
 通の俗字ども知ると稀にて漢字雅言を知らざ假名使てにをばふにも辨へば偏傍を  
 らよと得ざるに只言語をのさもて教えて寫せる吾苦心といふへうもあらざ況て  
 教を承て寫く者と夢路を逃る心地して困じて果はうち泣くめり然而代寫一枚は滿  
 れば讀返させて又教て傍訓を寫するに熟字を知らざ又句讀をよとる得絲バ讀時或  
 の字を脱し或のさき字と添て讀めり讀どら輒うらざるに知らざよとる得ざる事を  
 口授せられて寫者の艱難を思へばいと痛さに幾度う己をやと思ふを又思のへして  
 筆捨れ松のふる葉も言は葉も子等よをしえくのさるぞ愛死とうち詠きて且慰  
 然の一二卷代寫させぬる程に他もやうやくに熟て苦心初の如くわいわらず偏

傍るどの稍<sup>や</sup>もた<sup>ま</sup>へ知りて言<sup>こと</sup>を費<sup>つ</sup>とも舌<sup>あ</sup>の疲<sup>つか</sup>るゝまで<sup>いた</sup>に至<sup>いた</sup>らず編<sup>へん</sup>中<sup>ちゆう</sup>の出<sup>し</sup>像<sup>さう</sup>の代<sup>だい</sup>寫<sup>ぎやう</sup>  
 さそべき者<sup>もの</sup>あければ吾<sup>われ</sup>只<sup>ただ</sup>其<sup>その</sup>人物<sup>じんぶつ</sup>を圈<sup>けん</sup>點<sup>てん</sup>してもて畫<sup>え</sup>工<sup>こう</sup>は傳<sup>つた</sup>ふるに委<sup>こま</sup>細<sup>か</sup>な注<sup>ちゆう</sup>文<sup>もん</sup>を代<sup>だい</sup>寫<sup>ぎやう</sup>  
 させぬるの之<sup>この</sup>稿<sup>かう</sup>本<sup>ほん</sup>のさら<sup>さら</sup>之<sup>この</sup>書<sup>しよ</sup>畫<sup>え</sup>工<sup>こう</sup>の寫<sup>しやう</sup>本<sup>ほん</sup>も吾<sup>われ</sup>いふ如<sup>ごと</sup>く寫<sup>か</sup>りや否<sup>いな</sup>心<sup>こころ</sup>許<sup>ゆる</sup>さく思<sup>おも</sup>へど  
 も術<sup>じゆつ</sup>なし況<sup>いは</sup>文中<sup>ちゆうちゆう</sup>に故<sup>こ</sup>事<sup>じ</sup>あどを引<sup>ひ</sup>用<sup>よう</sup>ひんと思<sup>おも</sup>ふに原<sup>げん</sup>本<sup>ほん</sup>は涉<sup>せつ</sup>らざまば暗<sup>あん</sup>記<sup>き</sup>の失<sup>あや</sup>あら  
 んとを恐<sup>おそ</sup>きて命<sup>めい</sup>じて其<sup>その</sup>書<sup>しよ</sup>を拿<sup>とり</sup>出<sup>だ</sup>させて讀<sup>よ</sup>むるに漢<sup>かん</sup>籍<sup>せき</sup>の及<sup>およ</sup>ぶべくもあらず假<sup>か</sup>名<sup>な</sup>まじ  
 りの古<sup>こ</sup>書<sup>しよ</sup>といへども傍<sup>つ</sup>訓<sup>しゆん</sup>あさひ得<sup>え</sup>讀<sup>よ</sup>す強<sup>たか</sup>て讀<sup>よ</sup>まさば鶴<sup>つ</sup>舌<sup>せつ</sup>侏<sup>しゆ</sup>離<sup>り</sup>にて要<sup>えい</sup>をあさねば援<sup>えん</sup>  
 用<sup>よう</sup>ふべくもあらず寫<sup>か</sup>せるとい<sup>い</sup>致<sup>せ</sup>もとせど讀<sup>よ</sup>むる事<sup>こと</sup>の吾<sup>われ</sup>見<sup>み</sup>るにあらざまばいよ難<sup>がた</sup>  
 義<sup>ぎ</sup>にて實<sup>じつ</sup>にせん方<sup>かた</sup>あし然<sup>しか</sup>ども教<sup>きやう</sup>誨<sup>ゐ</sup>を承<sup>う</sup>る者<sup>もの</sup>の困<sup>こま</sup>じながらも倦<sup>う</sup>傳<sup>でん</sup>よく魁<sup>けい</sup>にあらざ  
 まば這<sup>この</sup>十<sup>じゆ</sup>卷<sup>まき</sup>を綴<sup>つ</sup>り果<sup>は</sup>して局<sup>きよく</sup>を結<sup>む</sup>ぶに至<sup>いた</sup>らんや縫<sup>ぬい</sup>刺<sup>はり</sup>の技<sup>わざ</sup>薪<sup>しん</sup>炊<sup>か</sup>の事<sup>こと</sup>あどこそ他<sup>かれ</sup>が職<sup>しやく</sup>分<sup>ぶん</sup>  
 なき文<sup>ぶん</sup>墨<sup>ぼく</sup>風<sup>ふう</sup>流<sup>りゆう</sup>の事<sup>こと</sup>又<sup>また</sup>代<sup>か</sup>らせて其<sup>その</sup>要<sup>えい</sup>を做<sup>な</sup>さまく欲<sup>ほ</sup>するの理<sup>わり</sup>あしども理<sup>わり</sup>あしど知<sup>ち</sup>りつ  
 ゝも月<sup>つき</sup>を累<sup>かさ</sup>ねて今<sup>こ</sup>茲<sup>こ</sup>辛<sup>しん</sup>丑<sup>しゆ</sup>の秋<sup>あき</sup>八<sup>はち</sup>月<sup>げつ</sup>廿<sup>にじふ</sup>日<sup>にち</sup>といふ日<sup>ひ</sup>に本<sup>ほん</sup>傳<sup>でん</sup>第<sup>だい</sup>百<sup>ひやく</sup>八<sup>はち</sup>十<sup>じゆ</sup>勝<sup>しやう</sup>回<sup>かい</sup>は下<sup>げ</sup>編<sup>へん</sup>附<sup>ふ</sup>録<sup>ろく</sup>  
 目<sup>もく</sup>諸<sup>しよ</sup>將<sup>しやう</sup>の成<sup>せい</sup>敗<sup>ばい</sup>其<sup>その</sup>尾<sup>び</sup>を備<sup>び</sup>にそといふ結<sup>む</sup>局<sup>きよく</sup>大<sup>だい</sup>圓<sup>えん</sup>まで稍<sup>せう</sup>稿<sup>かう</sup>じ果<sup>は</sup>りき云<sup>い</sup>々と見<sup>み</sup>ゆ

嘉永元年十一月六日病歿享年八十二辭世は歌ありとく傳る

世の中れやくとのみきくもとれま

かへそとゆえとゆちの人形

新編神皇正統記

新編神皇正統記

廿二

新編神皇正統記

明治十六年七月十四日御届  
同 年七月廿八日出版

〔定價金拾五錢〕

編輯人

東京府平民

西村宇吉

神田區花房町七番地

出版人

東京府平民

宇都宮榮太郎

同區花田町壹番地

發兌元

東京神田區花田町壹番地

耕文社

日本橋區通油町

水野慶次郎

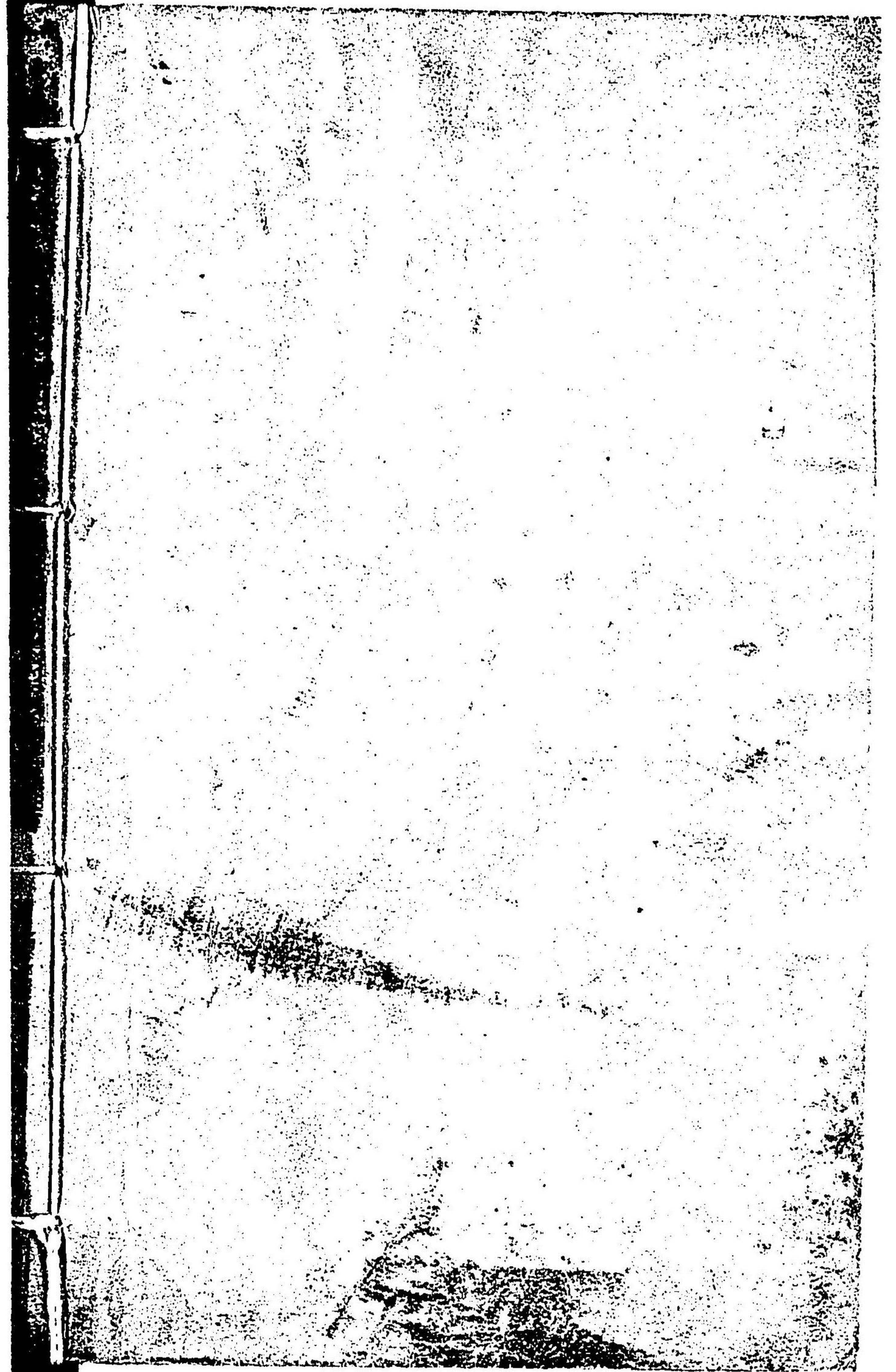
同區新上町

山本平吉

各 地 賣 捌 所

東京芝三島町	山中市兵衛	同牛込肴町	深野彌兵衛
同横山町	辻岡屋文助	同本石町貳丁目	小宮山昇平
同通三丁目	丸屋鉄次郎	同本郷春木町	解明堂
同兩國吉川町	松木平吉	同兩國米澤町三丁目	稻垣良助
同南傳馬町壹丁目	萬屋吉兵衛	横濱太田町	伊勢屋梅藏
同神田裏神保町	鶴聲社	大坂本町	岡島眞七
同神田雉子町	巖々堂	下總千葉町	立眞舍
同元大坂町	法木徳兵衛	信濃國諏訪角町	藤森平五郎
同室町三丁目	滑稽堂秋山	陸中盛岡	木津屋藤兵衛
同蠣殼町壹丁目	榮文堂篠田	同	久保田屋庄兵衛
同新上町	眞明堂	同石巻	三陸屋利兵衛
同長谷川町	武田平治	岩代福嶋	立身屋宇兵衛





特43

647

084920-000-1

特43-647

新編稗史通

西村 宇吉 / 撰

M16

DBB-0204

